

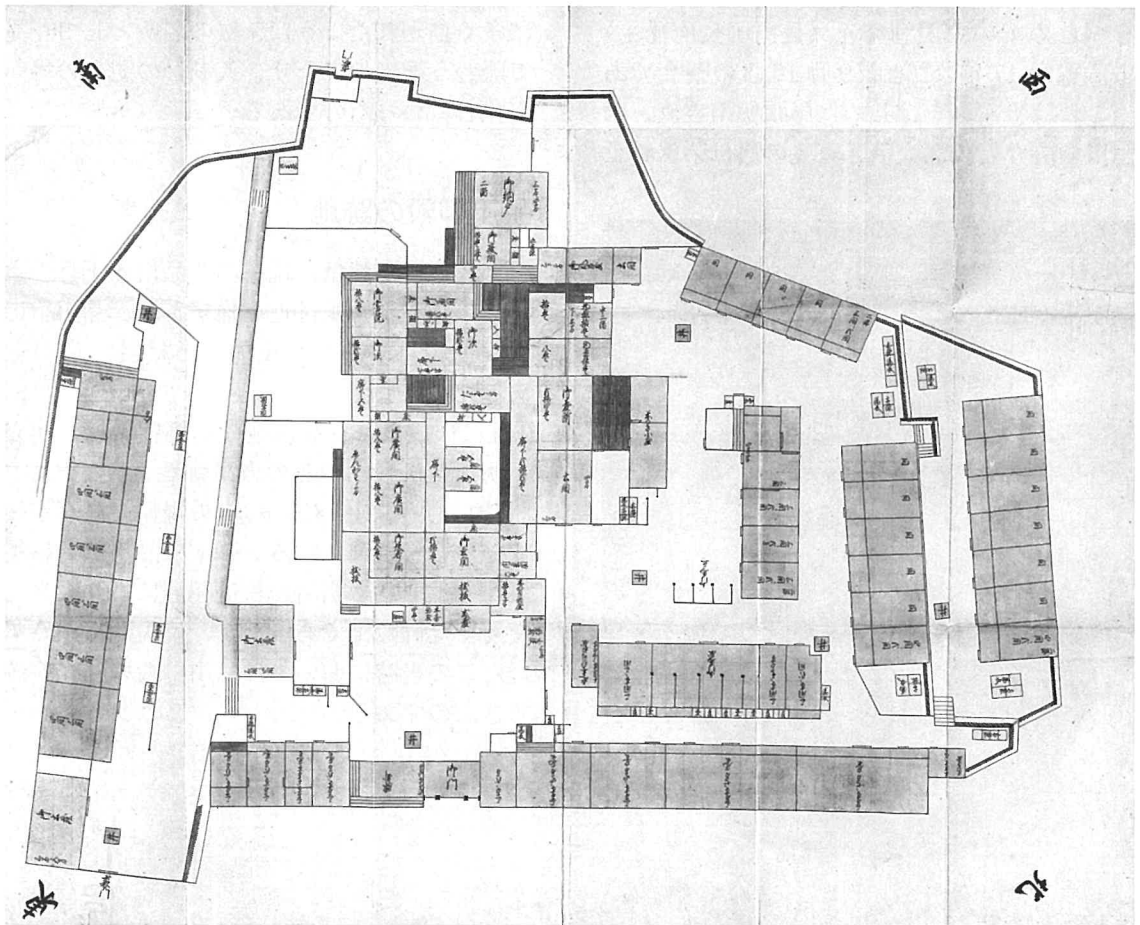
# 品川御殿

## 「御殿山」の由来

中世においては墓石や供養塔が立てられた霊場であり、船が航行するときの目印にしたとされる御殿山は、江戸時代中期に桜の名所となったが、徳川將軍家の別邸「品川御殿」にその名の由来をもつ。品川には、鷹狩場（品川筋。のうち、目黒筋と改称）があったことから歴代將軍がよく訪れており、御殿はその休憩所として使用された。また、海を一望できるその立地から、品川御殿は軍事的な意味を持ち、江戸の防衛上重要な位置にあったと想定されている。

## 徳川家光の品川御成

歴代將軍の中で最もよく品川を訪れたのが、三代徳川家光であった。茶会や鷹狩、寛永10年（1633）8月の馬揃え（閱兵式）など幕府の重要行事で度々使用した。その御成は18年間で200回近くを数え、葛西、王子、角田といった江戸周辺の御成場所の中で最も多いものである。東海寺開山の沢庵宗彭が小出吉英（但馬国出石藩主）に宛てた書状において、品川は景色もよく時々疲れを取りに来るところだという家光の言葉を書き留めており、家光自身好んで品川に足を運んでいたことがわかる。その御成の中心的な役割を担ったのが品川御殿である。寛永15年（1638）4月1日、家光が品川への新寺（東海寺）建立の話を持ち出したのも重臣と沢庵を



▲品川御殿図（品川区立品川歴史館所蔵）

招いた品川御殿での茶会であった。

家光は品川御殿や東海寺だけでなく、東海寺の鎮守となった北品川稻荷社（現・品川神社）、南品川の妙国寺（現・天妙国寺）、大井の常林寺（現・来迎院）などに足跡を残している。東海寺建立以前は、妙国寺へ多く御成し、寛永11年(1634)に五重塔を含む伽藍の再建を行った。

## 御殿山の大茶会

品川御殿は寛永10年(1633)の馬揃えの時には仮の御殿であったが、寛永13年(1636)5月21日の小堀遠州による献茶の時には、林に囲まれた御殿が整備された。

家光の在世時に品川で行われた茶会は、自ら亭主となったものを含め22回確認できる。品川御殿での茶会において最大規模を誇ったのが、遠州とともに古田織部の高弟で家光の御咄衆をつとめていた毛利秀元（長門国長府藩主）による寛永17年(1640)9月16日の茶会である。これは、家光をはじめ、尾張徳川義直、水戸徳川頼房などの諸大名、家光の異母弟保科正

之といった徳川一門、酒井忠勝、堀田正盛、松平信綱、阿部重次といった家光の重臣を招いた大茶会で、御殿の傍らに設けられた新亭で行われた。この茶会で使用された茶釜が下関の豊功神社に所蔵されている。このようにして、家光が度々重臣たちを招いて行った茶会では、政治的な議題も話し合われたと考えられている。

## 元禄15年の焼失とその後

品川御殿は、貞享2年(1685)8月に角田川御殿とともに修繕されたが、元禄15年(1702)2月11日、四ッ谷太宗寺付近からの出火により麻布御殿とともに焼失、8月14日に廃止され、以後再建されることはなかった。この火事では、家光が再建した妙国寺の五重塔が焼失するなど、品川でも大きな被害があった。

その後、將軍ゆかりの御殿山は、地誌や錦絵に多く描かれたように、桜の名所として花見客で賑わう観光地になり、人びとの憩いの場へと変化していったのである。

## 品川御殿の跡地

御殿の所在地は、現在の北品川4丁目の東京マリオットホテル付近と推定され、品川宿と海を眼前に見下ろし、東海寺とは目と鼻の先であったことがわかっている。弘化2年(1845)9月に作成された品川宿の明細帳には、起立は不明だが御殿山の北の方に跡地として8間に6間(約14.4×10.8メートル)の規模で礎石が残っていると記されている。幕末の品川御台場築造に伴う土取りや明治の鉄道開通により大きく姿を変えた御殿山であったが、焼失から150年を経たこの当時においては品川御殿の存在が確認できたのである。



▲瓢箪釜（下関・豊功神社所蔵）